

SYŌNEN SYŌZYŌ

# Sekai Bungaku Jensyū



ロシア民話  
せむしの小うま  
ルスランとリュドミラ  
アシケン  
ほか6編



# 少年少女 世界文学全集

ロシア編(1)

ロシア民話

アザドフスキー編・袋 一平 訳

せむしの小うま

エルショーフ作・高杉一郎 訳

ルスランとリュドミラ

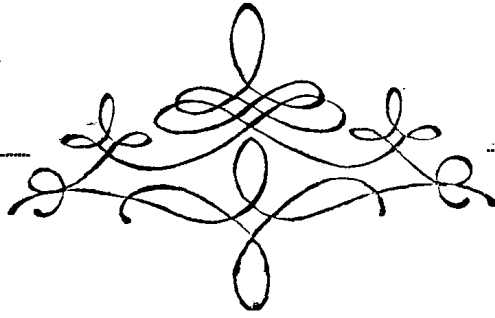
プーシキン作・袋 一平 訳

ほか6編



30

講談社



少年少女世界文学全集30

ロシア編 第1巻

著者の了  
解により  
検印廃止

N. D. C. 983

講談社 昭和37

406P 23cm

昭和37年6月20日発行

|      |   |   |   |
|------|---|---|---|
| 訳者代表 | 袋 | 一 | 平 |
| 発行者  | 野 | 間 | 省 |
| 印刷者  | 北 | 島 | 織 |

発行所 東京都文京区音羽町3ノ19 株式会社 講談社

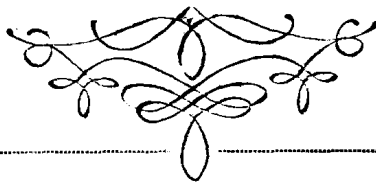
振替口座東京 3930 電話大塚 (941) 大代表 3111

|           |           |
|-----------|-----------|
| 印刷 大日本印刷  | 背皮 株式会社石井 |
| 製本 大進堂    | クロス 日本クロス |
| 本文用紙 本州製紙 |           |

定価 420 円

© 袋 一平 昭和37年

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします



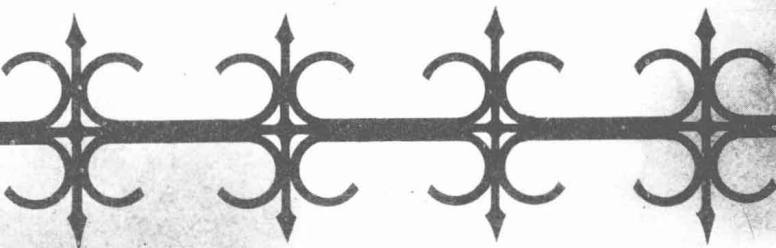
PRINTED IN JAPAN



目 次

少年 世界文学全集  
少女

第 30 卷  
ロシア編第 1 卷







イーゴリ遠征物語

西郷竹彦訳 101

クルイローフ寓話

クルイローフ作  
吉原武安訳 129

カラスとキツネ

131

声楽家

132

キツネとモルモット

133

うそつき

134

知事になったゾウ

136

ゾウとチン

137

ガ チ ヨ ウ

138

けもの村の村会そんかい

140

ハツカネズミとイエネズミ

141

ライオンとオオカミ

142

ゾウがライオン大王だいおうのお氣いきにいりになって

143

キツネの大王だいおう

145

水車すいしゃの粉屋こなやさん

146

カシワの木の下のブタ

148

カ  
ラ  
ス

149

シ  
チ  
ユ  
ー  
カ  
.....  
150

リ  
ス  
.....  
152

オ  
オ  
カ  
ミ  
と  
お  
す  
ネ  
コ  
.....  
153

リ  
ス  
.....  
154

貴  
族  
.....  
155

赤  
い  
花  
.....  
アクサーコフ作  
和久利誓一訳  
157

皇  
帝  
イ  
ワ  
ン  
と  
親  
衛  
兵  
と  
商  
人  
カ  
ラ  
シ  
ニ  
コ  
フ  
の  
物  
語  
.....  
レトルモントフ作  
和久利誓一訳  
187



おんどりとねことかえるの話

オドエフスキー作  
石山正三訳 207

せむしの小うま

エルシヨーフ作  
高杉一郎訳 233

第一章 さあ、お話を始めましょう

235

第二章 話はすらすらとすすむが、こと

はすらすらとはすすまない

249

第三章 きノウマでマカールは土百姓だったが、

いまでは見ちがえるような将軍さまだ

267

外

套

石山正三作 285

ルスランとリュドミラ

プーシキン作  
袋一平訳

はじめの歌

333

第一の歌

333

第二の歌

344

第三の歌

354

第四の歌

363

第五の歌

369

第六の歌

378

終わりの歌

386

読書指導

解説

読書指導研究会

黒滑沢川道浩  
400

高石和久吉西袋  
杉山久原郷一  
一正利武竹  
郎三一誓安彦平  
387

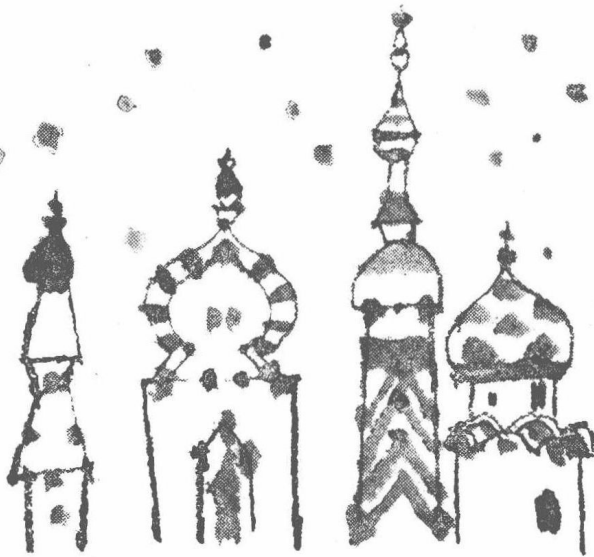
装本  
さしえ  
池田仙三郎  
遠藤てるよ  
寺島龍一

箕田源二郎  
松山文雄  
丸木俊子  
松田穰

# ロシア民話

アザドフスキー編

二 平訳





## ロシア民話

### について

ロシアの民話も、よその国の民話とおなじように、ロシア人の知恵と感情の産物です。

プーシキンも、「ムスランとリュドミラ」のなかで、「そこにロシアのたましいがあり、そ

こにロシアがにっている。」といっています。

民話のいずみから、ロシアの作家はかずかずの傑作をくみだしました。民話となじんで、その国の文学をただしく理解することもできるのです。

ただ民話は文字であらわした文学とちがって、口から口へいつたえ、語りつがれてきたものです。たいがい作者という個人がありません。それは民族の精神のあらわれであり、作者は民族自身なのです。

ロシアは世界に名だたる民話の宝庫だ、といわれています。それを文字にうつして、ながく保存しようとするしごとがいろいろなされています。そのさい、民話が個人の文学的作品にかかわることがあります。また、語り手が語るものをそのままそっくりうつしとる、というべつの研究のしかたもあります。

ここではマガイという有名な語り手のおじいさんのお話を、じかにきくことにしました。

(袋 一平)

## ふしぎなゆびわ

### 1

ある町に商人しやうじんがすんでいました。商人しやうじんにはイワンという男の子がいました。イワンがまだ大きくならないうちに、おとうさんはなくなり、イワンはおかあさんとふたりだけになりました。

イワンは商人しやうじんというものがだいきらいでした。けっしてお店みせにでたことがなく、しじゅう町の往來かうらいをぶらぶらしていました。おかあさんはそれがしんぱいでたまりません。お店みせの手つだいをするか、それともなにか家のしごとでもするようと、イワンをしかるのですが、どうしてもイワンはいうことをききません。町の人はみんなイワンを知しっていました。けれどもちゃんとしたみょうじでよばないで、ぞんざいに、

「お店みせのイワン」とよびつけにするだけでした。

ある日のこと、イワンはおかあさんにいいました。

「おかあさん、ぼくに百ルーブリくださいな。」

「なんで百ルーブリなんて大金たいきんがいるんだい。」

と、おかあさんはききます。

「買かいにいくんだよ。」と、イワンはこたえます。「うちのお店みせにないものを、市場いちばで買かいだしてこようと思つてね。」

おかあさんは百ルーブリわたしました。イワンは市場いちばにきました。市場いちばじゅうをさがしてあるきましたが、氣きにいるものはなんにもありません。イワンは家にかえろうと思つて、とちゅうまでくると、ひとりのお百姓ひやうしやうにいました。お百姓ひやうしやうはねこをだいていました。

「お百姓ひやうしやうさん。」と、イワンは声をかけます。「そのねこをどこへもつていくの。」

お百姓ひやうしやうがこたえるには、

「なに、うちでは、いらないので、すてにくところだよ。

ほしい人があれば、だれにでもあげるよ。」

お店みせのイワンはいいます。

「そんなら、ぼくにおくれよ。お礼れいにいくらあげたらいいか

しら。」

「いくらだつていいさ。」

お店のイワンは百ルーブリとりだして、お百姓にわたします。お百姓はそれを見るときもをつぶしました。

「こんな大金では、おつりがないね。」

「おつりなんかいらないよ、みんなあげるよ。」

お百姓はつまらないねこのおかげで、思いもよらない大金がはいったので、大よろこびです。まるでころげるようにして、いっさんにかけていってしまいました。

お店のイワンはねこそでにくるんで、家のほうにひきかえました。まだいくらもあるかないうちに、ふいにねこそでの下にもぐったかと思うと、手をすりぬけて、にげだしました。イワンはねこそをおいかけました。町の人たちにも、つかまえてくれるようにたのんだのですが、なんにもなりません。——ねこはとうとうみえなくなりました。

お店のイワンが家にかえつてくると、おかあさんはたずねます。

「どうだった、イワン、買うものがあつたかい。」

「あつたけどねえ、おかあさん、お金がたりないんだよ。あ

と百ルーブリいるんだよ。」

おかあさんはすこしけんぼうでした。お金がおしくてたまらないのですが、それでもせがれのほうをもっとだいじです。そこでまた百ルーブリだしてやりました。

イワンはもういちど市場にいきました。いくら市場じゅうをさがしまわつても、買いたいものはなんにもみつかりません。わが家へとひきかえました。とちゅうでべつのお百姓にいました。黒てんをもっています。お店のイワンはお百姓にたずねます。

「そのてんをどこへもつていくの。」

「市場で売ろうと思つてね、じぶんでそだてたんだが、ひどくできがわるいもんだからね。」

「そんなら、ぼくに売つてくれないか。」

「いいとも。」

「じゃ、いくらで売つてくれる。」

「いくらでもいいよ。どうせしよのないてんなんだから。」

イワンは百ルーブリとりだして、お百姓にわたします。お百姓はびつくりしています。

「いくらおつりをだしたらいいんだろう。」

「いいからみんなとっておき。」

お百姓は大よろこびで、はねるようにしてもどつていきました。お店のイワンは、てんをもって家にかえる道々考えます。

（とにかく黒てんをじぶんでそだててみよう。もう一びき買えば、一つがいいになるから、だんだんにふやしていけるにちがいない。）

ちやうどそのとき、黒てんはふいにその下にもぐったかと思うと、手をすりぬけて、にげだしました。イワンはそれ



をおいかけながら、つかまえてくれるように、大声でたのん

だりわめいたりしました。だがもう黒てんは、かげもかたちもありません。しかたなくイワンは手ぶらで家にかえりました。それをみて、おかあさんはたずねます。

「どうだった、イワン、買ったかい。」

「とてもいいものなんだけど、どうしてもまだお金がたりないんだよ。あともう百ルーブリ、だしてくださいな。」

「そんなにまいにち百ルーブリずつもつていかれたら、うちでは一文なしになってしまうよ。」

そうこぼしながらも、おかあさんはまたしぶしぶ百ルーブリわたしました。イワンは市場にいきましたが、やはりこんども買いたいようなものは一つもなく、氣にいるようなものもまったくありません。

ふと目をあげると——ひとりのお百姓が鉄砲をさげていきます。それが、みるのもきまりがわるいほど、まっかにさびているのです。イワンはこの鉄砲を買おうかしら、と思いつきました。

（お店で商売するくらいなら、獵にでもでかけたほうがよっぽどましだ。）と考えて、声をかけました。

「その鉄砲はいくらだい。」

「いくらだっていいよ。売れなかったら、ごみばこにでもするつもりだったんだ。どうせおれにはいらぬしろものだからね。」

お店のイワンは百ループリとりだして、お百姓にわたします。お百姓はびっくりしていいます。

「いくらおつりをだしたらいいんだい。」

「なに、おつりなんかいらぬいさ。」

鉄砲をうけとり、それにつめるたまを買いました。家にかえると、おかあさんにむかつて、

「ほら、おかあさん、この鉄砲を買ってきたよ。狸にいくんだから、お祝いしてくださいな。」

おかあさんは、きたない鉄砲を手にとってみて、いきなりイワンのほおをピシャリとなぐりました。

「ほら、これがお祝いだよ。」

イワンは口の中でつぶやきます。

「ありがとう、おかあさん、なかなかいいお祝いだね。」

おかあさんはぶつぶつことをいいながら、走っていつて火ばしをつかんできました。

「とつととでていけ、おまえの顔なんかもう二度とみたくな  
いよ。」

## 2

イワンは鉄砲をつかんでおもてにとびだし、ちよつと考えながら、しかたがないというように手をふって、市場にむかいました。市場にくると、かたかけかばんや湯わかしやパンや塩を買ひ、それをかばんにいれたり、むすびつけたりして、それから森にすすんでいきました。

森の中をあるいていくと、ずいぶんたつてから、なにかドタバタするみような物音が耳にはいりました。イワンはその物音にひかれて草地にでました。すると、どうでしょう、草地では食うか食われるかのはげしいたたかいがはじまっているのです。けだものの王といわれるライオンと、へび族の王といわれるりゅうとが、たたかっているのです。

お店のイワンは、ものめずらしそうに目をみはりました。ずいぶんながいあいだながめていましたが、いつまでたつてもきりがないので、とうとう大声をかけて、ひきわけてやろうとしました。その大声をきくと、動物の大將たちは思わ